



輸送経済 9/25

THE YUSO-KEIZAI

第2767号 昭和24年4月23日 (第三種郵便物認可)

平成19年
(2007)
(火曜日)
週刊

物流イメージどう変える？③

物流の“匠”

モノづくりの世界に、「匠」がいるが、物流の世界にも多くの「匠」が存在する。ご紹介するのはほんの一部だが、業界イメージアップのためには、「こうした「匠」たちの技術を、広く世に広げたい」という思いが大切だ。



オンリーワンの実績

有田秀利埼玉ネットワークセンター長

動物で学んだ“運ぶ心”

ち込んだほど。調教師の無視した依頼もあっ訓練のいかにもあり、引いた。ソウの運搬だった。越しは無事成功。ソウは自分が重いと知っていた。以来、ロコモで評判がっている。クレーンで吊り広がり、キリン、ソウ、上げられ、地面から足がサイ、ライオン、オカビ離れると、パニックにななどを、トラックや時にってしまつたため、一カ月はフェリーを使って、十ほど訓練が必要だ。数回運んでいる。

動物の性格はさまざま。教えずに一目では運び出せない。(同)と依頼を辞退。別の業者がぶつけ本番でソウを運び出したところ、牙で飼育員が大げがをしたと聞いた。現在、多摩運送で動物輸送を手掛けるのは、有田センター長一人だけ。

多摩運送(本社・東京)にある多摩動物公園から、都立川市、星野三三会長の話を受けたのが始まり。兼社長として、動物輸送のり。担当したのは、アフスベシヤリストとして活リカソウのアイちゃん。躍する埼玉ネットワーク(メソ)。

「まるで、目から血が出た。お客さまから預かったものを大切に運ぶ」という気持ちがあれば、誰でもできる。やりたいと志願してくれる人が早く現れてほしい。(同)。

センターの有田秀利センター長。発地の姫路市立動物園に下見に行ったとき、お

初めて手掛けたのは、まりのやんちゃぶりに十三、十四年前。立川世「本言に運べるのか」と薬所長になった。都内(有田センター長)と落

動物輸送の“匠” 多摩運送